



## What do we talk about when we talk about Film Studies?



馬 然 (MA Ran)

As a film scholar, my friends often jokingly express their jealousy of my “job,” which for them is mostly about “watching films we like”. It is not totally wrong. For our G-30 courses on film history for instance, we require our students to spend substantial time watching and discussing films listed on the syllabus. Among them, there are enjoyable films like the Wizard of Oz, produced in 1939 by a Hollywood studio called Metro-Goldwyn-Mayer (MGM).

In this global age when even a 3-year-old knows how to play with iPhone and iPad and enjoy their favorite online “videos,” people may not need academic training in film studies to learn how to appreciate and evaluate a specific film work. However, I guess our training would in the first place broaden your vision in understanding “what is cinema,” and to answer this question you need to watch not only Hollywood mainstream or Hong Kong

Kungfu actions, but also films that might be challenging to watch because of their style, length, or even contents. To study cinema is also to explore and reflect on the modern development of human societies. It is to explore our own desires and fears. Sometimes we watch films to escape from the realities, and sometimes we do so because we want to make sense of own existence so that we could ask significant questions both to ourselves and to the world we are living in.

(photo: prop from the film *Alien*, designed by H.G. Giger, at German Film Museum, Frankfurt.)

学生たちの研究生活—File24

## 今年度の研究生活

研究室名：ドイツ文学研究室

私の研究テーマは戦間期の日独文化交流です。1930年代に日本で制作された日独合作映画を主な研究対象に、日独防共協定から三国同盟に至るまでの日独関係の在り方を文化面での交流に着目し分析しています。

今年度は、ゼミでは Kulturwissenschaft をテーマにドイツ文学のみならず「文学」、「文化」という、普段私たちが無批判に受け入れてしまっている概念の在り方を改めて問いかけ、他の学生と先生を交え充実した議論ができました。

また大学での研究活動に加え、東京・ベルリンの二か所で研究調査を行うことができました。東京での調査では、国立近代美術館東京フィルムセンターに保存されている3本の貴重な日独合作映画を鑑賞



させていただくことができました。これらの作品はソフト化されておらず、また先行研究でもほとんど取り上げられていないため、今回実際に鑑賞する機会を得たことは非常に幸運でした。ベルリンでの調査では、当時ドイツで発行されていた日本を紹介する雑誌を閲覧し、ドイツが同盟のパートナーである日本をどのように紹介していたのかを知ることができました。

冬には、今年度の研究活動のまとめとして日本独文学会東海支部の冬季研究発表会で研究報告を行いました。大勢の研究者のみなさんの前で自分の研究成果について発表させて頂き、示唆に富んだご意見を頂けたことは大いに励みになりました。 [中川 拓哉 (博士後期課程 3年)]

学生たちの研究生活—File25

## 「地」の「理」について学ぶ

研究室名：地理学研究室

地理学は哲学に匹敵する人類最古の学問のひとつであると言われています。「その土地に何があるのか?」、「どこにどんな場所があるのか?」という問いは今も人間の根本にあり、それが地理学の原点でもあります。現代では、スマートフォンを使って誰でも簡単に地図を見ることができるようになりましたが、ここまで普及しているのは地図の持つ情報、つまり「何がどこにあるのか」という地理情報が相変わらず人間にとって欠かせない知識であるからでしょう。



地図を描き、生活に役立てることは現代人のみの特権ではありません。私は近世に描かれた城下町絵図を用いて、当時の都市の姿を復原する研究を行っています。こうした研究が可能である

のも、当時の人々が、現実の都市や地域の姿を確かに反映した地図を道具として役立てていたからにほかなりません。

私のように都市や地域の過去を追求するだけでなく、本研究室では幅広く地理学について学びます。2, 3年生向けに「地理学野外実習」という授業があり、文献調査からフィールドワーク、プレゼンテーション、調査報告書の執筆までおよそ一年かけて行います。研究テーマは幅広く設定でき、地形や植生、水質といった自然環境に関することから産業や歴史、文化といった人間・社会に関することまで多様な視点から「地域」を調査していきます。文献やインターネットなどを通じて得た知識・データだけでなく、「実際にその場所に何があるのか?」、「そこで暮らす人々は何をしているのか?」ということを目で見て、肌で感じ、「なぜそうなのか?」と考えることでその場所・地域について理解するという地理学の原点と醍醐味を実体験できるのではないかと思います。 [児玉 史 (博士前期課程 2年)]

最近の文学部

## 世界に開かれた名大文学部!

教員の手作業中心で刊行している月刊名大文学部も、早いもので第70号となりました。その記念に初の英語コラム掲載です。留学生に英語による授業を提供するG30プログラムの研究室が集まる文学部2階は、廊下に英語が飛び交うまさに国際的な空間。各国の留学生との交流が活発なのも名大の特色です。(YK記)

\*本紙では、名大文学部の多彩な内容を順に紹介していきますが、それまで待てない人は...  
名大文学部のWEBサイト <http://www.lit.nagoya-u.ac.jp/> まで (『月刊名大文学部』のバックナンバーもあります)